

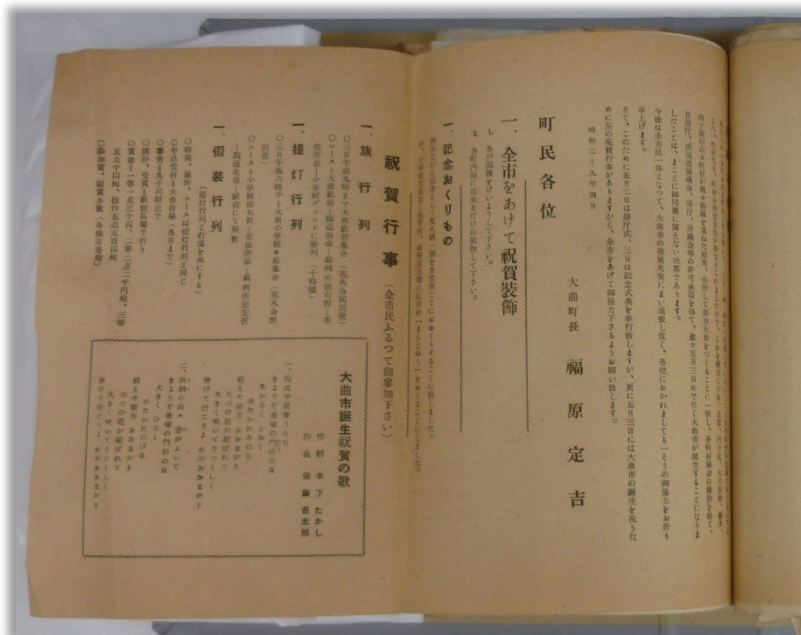
# 昭和の大合併



## 市制記念 大曲市勢要覧 1954

昭和29年5月3日に6町村が合併して誕生した大曲市の最初の市勢要覧。大曲市誕生を記念して「大曲市誕生祝賀の歌」が作られた。5月1日現在の人口は36,366人、面積96.5km<sup>2</sup>だった。翌年に角間川町が加わり、現在の大曲地域の広さとなった。

昭和29年 大曲市役所行政刊行物



## 市制施行記念事ム簿

昭和29年5月3日に大曲町、花館村、内小友村、大川西根村、藤木村、四ツ屋村の6町村が合併して誕生した大曲市の、市制記念行事に関する簿冊。市制施行記念に全市民に夏火鉢が贈られ、小学校生徒、保育園・幼稚園児童には紅白まんじゅうが配られた。当日は旗行列・提灯行列・仮装行列が街中を練り歩いた。

昭和29年 大曲市役所文書

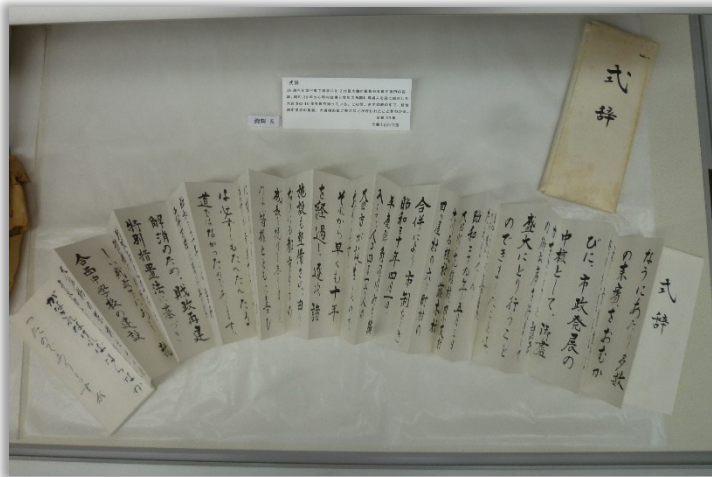
♪ 大曲市役所前 山形観光キャラバン  
昭和30年10月2日 大曲市役所文書



♪ 市役所あんない =1954版=  
昭和29年 大曲行政刊行物

SCRAP BOOK

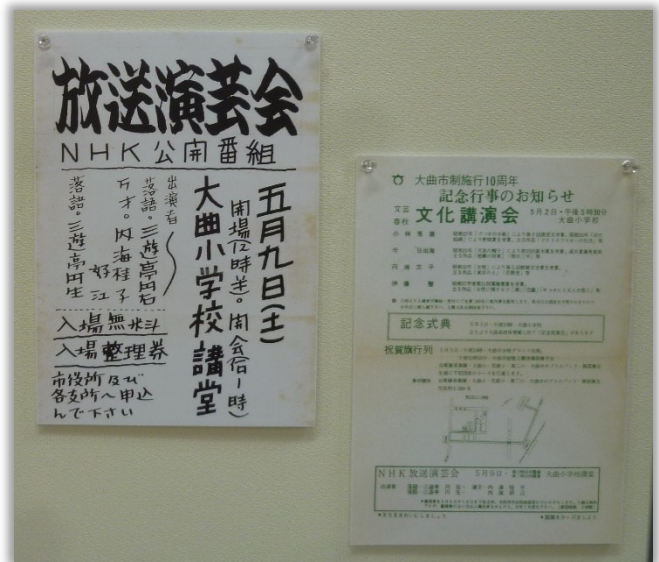
大曲市内の合併後の各施設の写真を貼付したスクラップブック。市内各支所は旧村役場の建物。駐在所や病院、公営住宅なども写されている。当時はほとんどが木造建築だった。  
昭和30年代 大曲市役所文書



式辞

10周年記念行事で読まれた2代目大曲市長板谷五郎左衛門の式辞。昭和29年の6町村合併と翌年の角間川町編入を経て誕生した大曲市の10年を振り返っている。この間、赤字財政の中で、統合西中学校の建設、大盛橋の架け替えなどが行われたことがわかる。

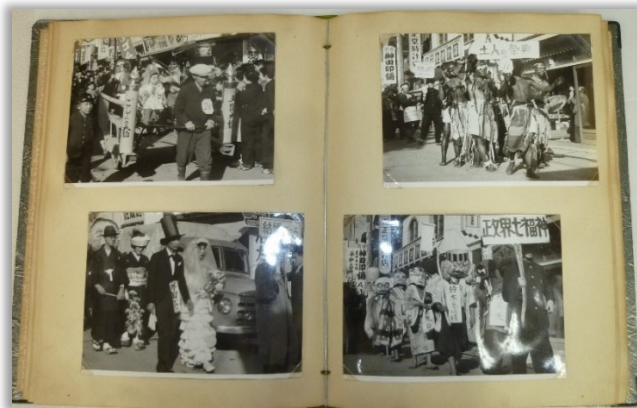
昭和39年 大曲市役所文書



市制十周年記念行事関係綴 No.2 ほか

市制10周年行事として、NHK公開番組「放送演芸会」や文芸春秋「文化講演会」など、著名人を大曲に招いて記念行事を開催した。写真は、文化講演会のために来曲した小林秀雄、今日出海、円地文子、伊藤整を囲んだ記念写真。  
昭和39年 大曲市役所文書

戦後の人々の生活



SCRAP BOOK  
The Obako conncours AND The Sangyo Sinko

商工課が作成したスクラップブック形式の写真アルバム。合併前から開催していたおばこコンクールや大曲市産業振興祭などの写真。産業振興祭に合わせて大曲農業高校の仮装行列も行われた。

昭和30年～31年 大曲市役所文書

大曲 ŌMAGARI

秋田県大曲市商工課

商工課のスクラップブックに挟まれていた大曲についてのリーフレット。市内の祭りやイベント、お土産品などが紹介されている。

昭和30年代 大曲市役所文書





映画の宣伝  
井上一郎写真資料



商店街  
井上一郎写真資料

## 買い物はメートル法で！～昭和34年1月から完全実施～



昭和34年1月の本格実施を前に、各自治体では普及活動を行いました。

大曲市役所文書(S-03-163104)

大正10年にメートル法が採用されましたが、昭和30年代になっても尺貫法が使われていました。





### 大曲町商工明細図

昭和の大合併前の大曲町の商工明細図。現在もその場所にあるお店の名前が見える。昭和20年代 渡邊勝巳資料



### 大売出し

井上一郎写真資料



街角の日常

井上一郎写真資料



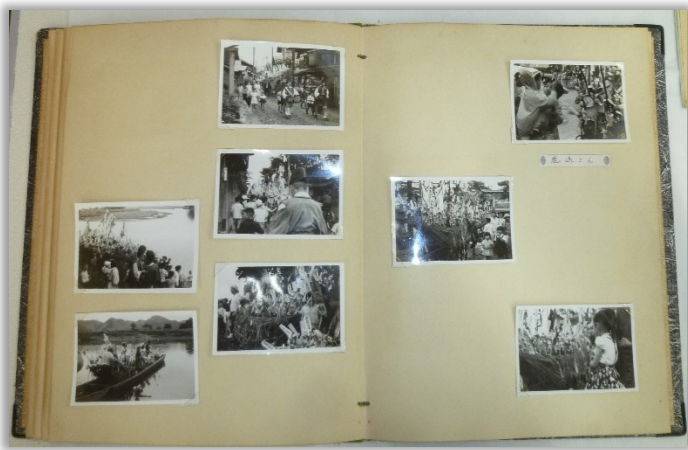
農家の食卓

井上一郎写真資料



がかり  
駅電話掛（手動時  
代の交換手）

田宮利雄写真資料



**SCRAP BOOK**

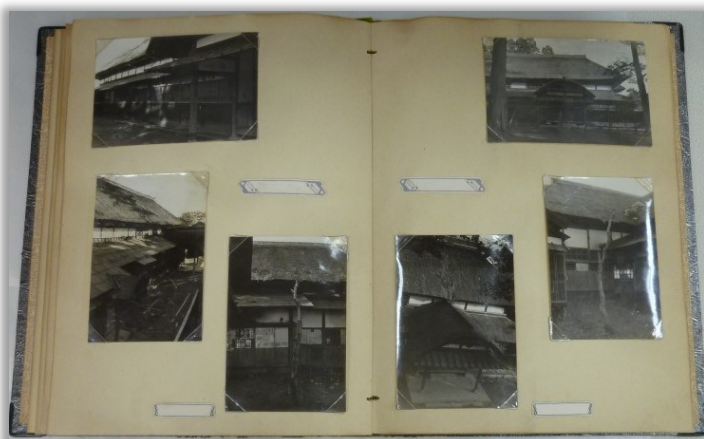
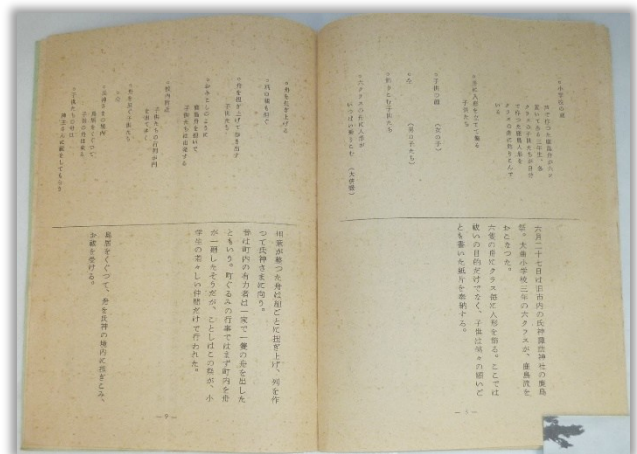
鹿島流しや綱引き、第16回国民体育大会の写真などが貼付されているスクラップブック形式の写真アルバム。写真は諏訪神社の「鹿嶋さん」（鹿島流し）の様子。

昭和36年 大曲市役所文書

**こども歳時記 24 雄物川の鹿島流し**

大阪テレビフィルム制作の番組シナリオ。大曲の諏訪神社の鹿島流しについて書かれている。大曲市商工観光課が制作に協力したものでしょうか。商工観光課のスクラップブックに挟まれていた。

昭和30年代 大曲市役所文書



**SCRAP BOOK**

重要文化財の古四王神社や丸子川の風景などを貼付したスクラップブック形式の写真アルバム。写真は、江戸時代の本陣だった鞠水館。県の指定文化財だった。老朽化のため昭和43年に解体された。

昭和38年 大曲市役所文書

**SCRAP BOOK**

大曲市勤労青少年ホームの竣工式や石油資源開発の試掘開抗式などの写真を貼付したスクラップブック形式の写真アルバム。写真は昭和37年頃の大曲駅構内と駅前。駅前には、大曲工業高校の開校記念の広告塔が設置されている。

昭和37年～45年 大曲市役所文書





### 蒸気機関車

昭和30年 井上一郎写真資料



### 蒸気機関車

大曲市役所文書



### バスとオート三輪

昭和34年頃 井上一郎写真資料



### バスの車掌

井上一郎写真資料



### 渡し舟

昭和30年頃 井上一郎写真資料



### トテ馬車

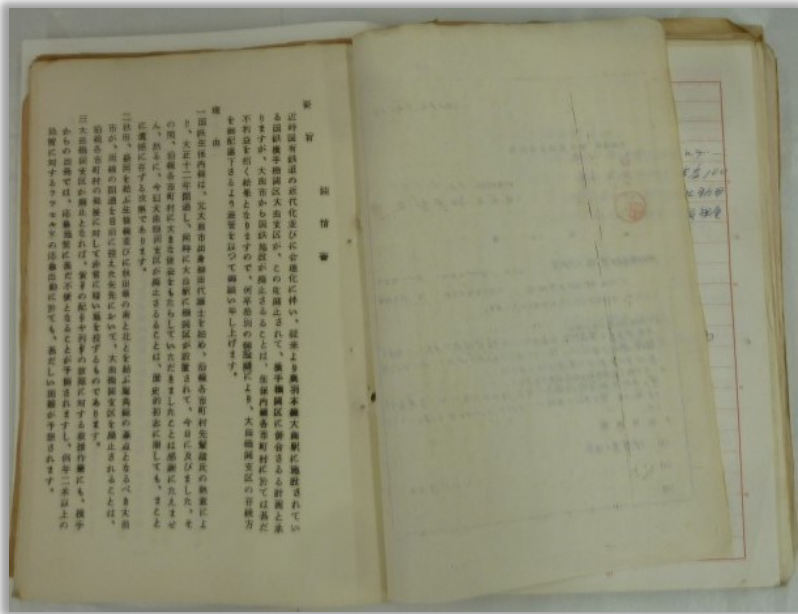
昭和30年頃 井上一郎写真資料



我が家の自家用車  
昭和30年代 井上一郎写真資料



玉川橋  
昭和49年 大曲市役所文書



国鉄生保内線ディーゼル化資料

国鉄は、1960年代に段階的に生保内線のディーゼル化を進めた。国鉄の近代化・合理化の一環で、これに伴い機関区の統合などが図られた。展示資料は、大曲機関区が横手機関区に併合される計画に対して、大曲市長名で陳情したもの。生保内線開通に尽力した榊田清兵衛の名前も見える。

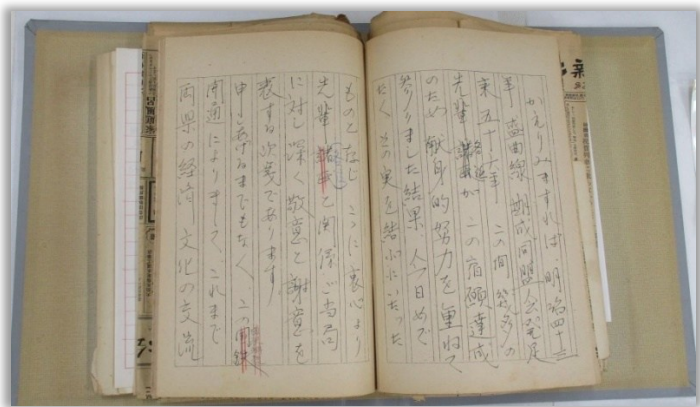
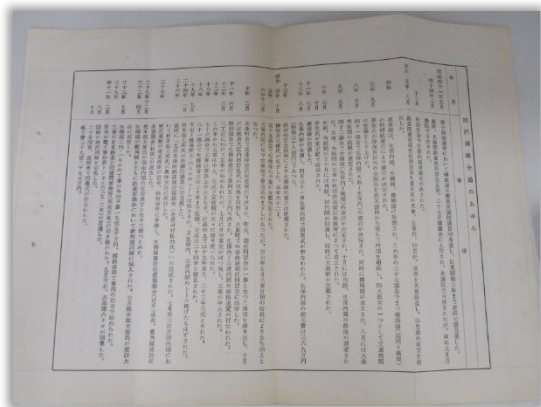
昭和35年～38年 大曲市役所文書

アルバム 生保内線＝田沢湖線（1）

元国鉄（JR）職員だった田宮利雄が作成した鉄道関係の写真アルバム。昭和33年の生保内線の各駅・線路上の写真や昭和57年の田沢湖線電化に関する写真が中心。昭和56年の田沢湖線の車体や鶯野駅が写されている。

昭和33年～57年 田宮利雄資料

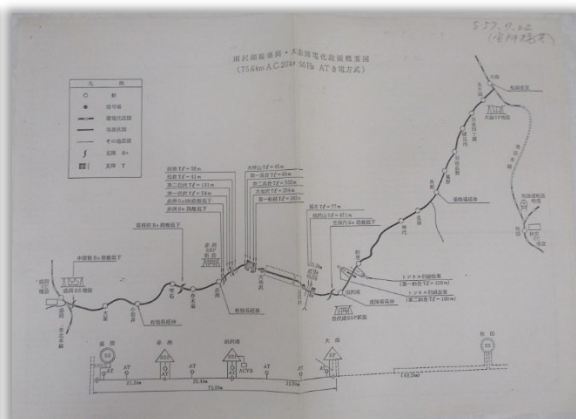




**田沢湖線全通祝賀会関係書類**

昭和 41 年 10 月 20 日、念願だった生保内線が全線開通し、「田沢湖線」と改称された。全線開通祝賀会が盛岡市で開かれ、出席した板谷五郎左衛門市長の祝辞では、明治 43 年の盛曲線期成同盟会発足以降の関係者への謝辞が述べられている。田沢湖線開通の立役者である榊田清兵衛の孫が、全線開通を原敬の墓前に報告した記事も綴られており、盛岡と大曲それぞれの功労者の絆を感じる。また、10 月 1 日には、国道仙岩峠貫通記念碑前での式典も行われた。

昭和 41 年 大曲市役所文書



**ダイヤ改正関連資料**

東北新幹線開業に合わせて実施された田沢湖線の電化工事の完成・開業に伴い作成されたパンフレットと田沢湖線盛岡・大曲間電化設備概要図。東北新幹線と特急たざわの連絡列車時刻表が掲載されている。当時、乗り換え時間はわずか 14～5 分、盛岡駅で足早に乗り換えホームに向かう姿がよく見られた。

昭和 57 年 11 月 田宮利雄資料

## 変わりゆく農村のすがた

敗戦後の日本は、GHQの指導のもと農地制度の民主化が進められ、戦前から始まった自作農創設の取組みは、昭和21（1946）年10月に公布された「自作農創設特別措置法」などにより急速に実現し、農地改革が断行されました。この結果、江戸時代からつづいた地主制度は解体され、農業形態は中小規模となったため、農業協同組合法（1947年）の成立により設立された農業協同組合（農協）を母体として、農村は組織化していくこととなります。

そうした中、農協による共同での機械利用が促進されたことで、農村の農業経営においても機械を導入しやすくなり、同時に昭和28（1953）年に公布された農業機械化促進法も後押ししたことで、農業経営の機械化が推し進められました。

一方で、自作農の増加と機械化の波は、江戸時代以前からつづく農村の風景や生活スタイルを変貌させ、農村においても新しい時代が始まったと言えます。

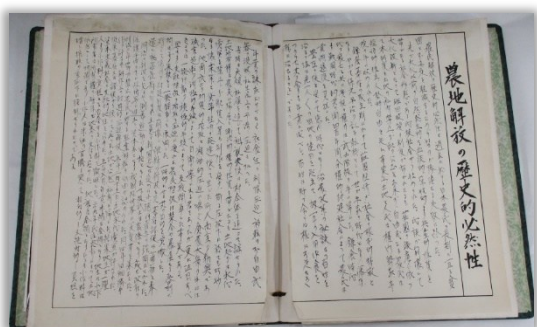


### 農民社会（一）

井上一郎が自分で撮影した内小友地域を中心とした写真を、大曲地域の農民社会についての6冊のスクラップブックにまとめた私製写真集。内小友村の地主であった佐藤家の写真とともに、「農地解放」のキャプションが付けられている。

また、農村の女性たちに化粧品を実践販売している様子や研修の写真など、女性解放運動の様子が収められている。

昭和20～30年代 井上一郎写真資料



### 農民と社会 時代の部

「農民社会」の続編。写真集でありながら、旧肝煎であった井上家の当主として、井上自身が感じた時代の流れと変化についての記録でもある。写真集の中には、当時の農村を生きる人々の姿がそのまま映し出されている。

昭和20～30年代 井上一郎写真資料



リヤカーに揺られて  
昭和30年代 井上一郎写真資料

藁を背負って  
昭和30年代 井上一郎写真資料



支払いはお米で  
昭和34年頃 井上一郎写真資料

田植え  
昭和40年頃 大曲市役所文書



## 農業の近代化

大正期になり、日本でも石油エンジンや電気モーターを動力とした動力脱穀機や動力耕運機が輸入され、さらに国内でも開発が進められました。はじめは脱穀機や精米機など、固定して使用する機械が開発され、次第に耕運機やコンバインなど、歩きながら使う機械の開発へと移っていきました。国産初の耕運機は昭和6（1931）年に誕生したと言われていますが、戦争に突入したことで石油不足となり、普及率は低いままでした。

戦後、食糧不足解消のために農業政策が推し進められ、昭和20年代後半から牛馬に代わり動力を用いた機械が普及していきました。特に昭和28（1953）年、農業機械化促進法が制定されたことでより一層機械化が進み、昭和40～50年代にピークを向かえました。

秋田県内では昭和15（1940）年頃から動力耕運機が使用され始め、秋田県立農業試験場で利用試験が始まりました。昭和33（1958）年頃からは乗用トラクターの試験が行われ、昭和38（1963）年になると更にコンバインの試験が加えられました。

## 農業の機械化年表

大正	石油動力や電気モーターが登場
	アメリカから耕運機やトラクターが輸入される
昭和初期	動力脱穀機・動力耨り機が開発される
	国産の動力耕運が登場するが、戦争に突入したことにより普及率は伸びなかった
昭和20年代	農林省がトラクターを輸入し、各地で試験運用が始まる
	昭和28（1953）年に <b>農業機械化促進法</b> が制定される
昭和30年代	アメリカから大型トラクターが輸入される
	<b>動力耕運機</b> が急激に普及し、60万台以上の普及台数になる
	バインダーが開発・普及する
	国産の <b>乗用トラクター</b> の開発・普及が進み20万台を突破
昭和40年代	アメリカから普通型コンバインを導入するも、日本の水田に合わず普及せず
	動力耕運機の普及台数が300万台を突破
	<b>自脱型コンバイン</b> （自動脱穀と刈取が行えるもの）が開発される
昭和50年代	動力式の歩行型田植機が開発される
	<b>乗用型田植機</b> が開発される



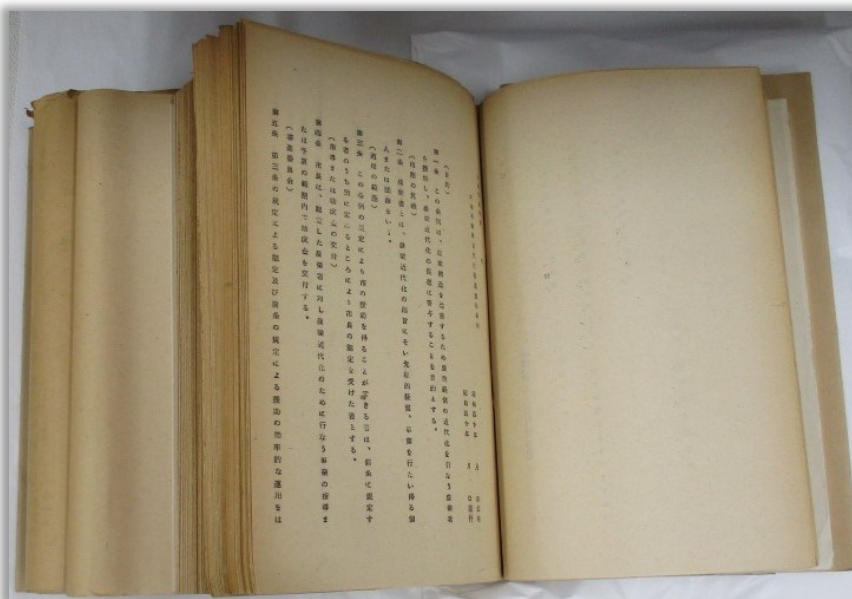
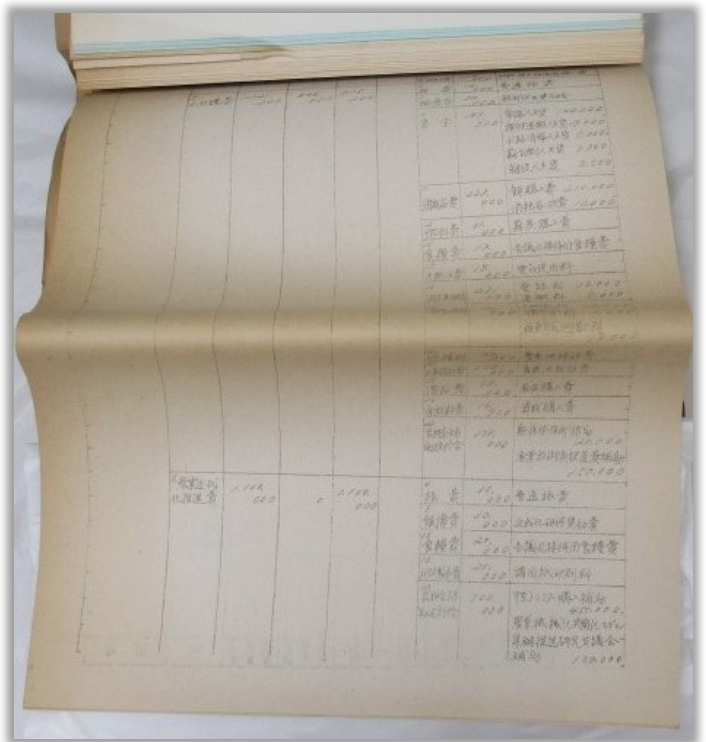
### 馬耕と耕運機

井上一郎写真資料

### 37 市議会会議録その 1

昭和 36 年度予算には無かった農業近代化推進費が、昭和 37 年度予算に組み込まれ、トラクターの購入補助や近代化研修のための報償費などが計上された。

昭和 37 年 大曲市役所文書



### 40 市議会会議録その 1

大曲市農業近代化推進援助条例が議決された。これにより農業者に対して近代化のための指導または助成金が交付されることとなった。

昭和 40 年 大曲市役所文書



## 大曲市におけるトラクターとコンバインの普及

昭和 36 (1961) 年、秋田県は県内各地に「機械化共同化モデル集落」を設定し、農業機械や施設の補助と指導を行いました。大曲市からは藤木南下深井集落が指定され、これがトラクター普及のきっかけになったと言われています。この時導入されたトラクターの性能を見た大曲市は、独自に補助金制度を整備し、農家に対して購入を奨励しました。農家も購入に積極的で、大曲市ではわずか 3 年間でトラクターが急激に普及しました。

また、大曲市では昭和 40 年代前後からコンバインの使用が見られます。昭和 41 (1966) 年に大曲市四ツ屋草刈野が「農業近代化パイロット集落」として指定され、ベルギー製の大型コンバインを試験的に導入しました。これは、昭和 38 年から昭和 44 年まで秋田県独自の政策として導入されたもので、農業を集団で行い、農業の効率化・規模拡大を目指して機械の導入等を行ったテスト集落のことです。現在の大曲市内でも、多くの地区がパイロット集落として指定されました。



乗用トラクターの  
試運転

大曲市広報写真 A-1-15-2-003

四ツ屋草刈野の大型  
コンバイン

大曲市広報写真 S55-15-3-004



広報おおまがり 第293号

11月6日から12日まで大曲小学校や大曲農業高校で行われた、第91回種苗交換会の様子。農機具会場では、コンバインやバインダーなどが数多く売られ、1週間の間に300台以上を売り上げた業者もいた。

昭和43年11月25日 大曲市広報写真

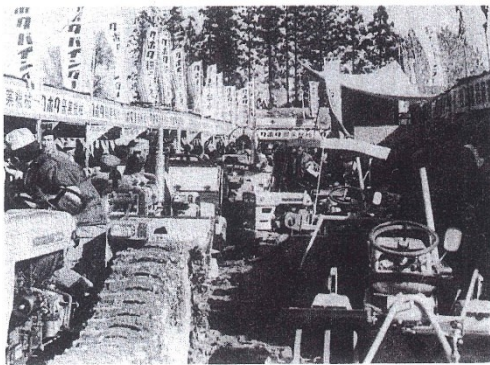
おおまがり 1968.11.25



参観者の数が多いことは過去の大曲会場の特徴でもありました。今回も67万人が期間中來曲したと交換会本部では推定しています。



審査対象の農産物出品は2501点。大曲特産の牛蒡やいぐさ製品も人目を引きました。



農機具展示場は金谷橋下の雄物川畔に小間群が立ちならび盛観をきわめました。近代農業をになう新鋭機械に農家の人々が多くここを訪れあちこちで商談が成立しているようでした。数種の売上げがあったということです。



第三会場（大曲中学校体育館）では、連日テレビ・ラジオの公開録画、や協賛催し物が開かれ満員の盛況でした。



大曲小学校体操場では、農業団体の各種大会が開かれました。



最近の交換会はマイカー時代の波にのり自家用車で訪れる人が急増しました。（写真は日の出町駐車場）



第二会場（大曲農高）では市内外優良商品展示即売があって、お買得品を目ざして多くの人が訪れました。

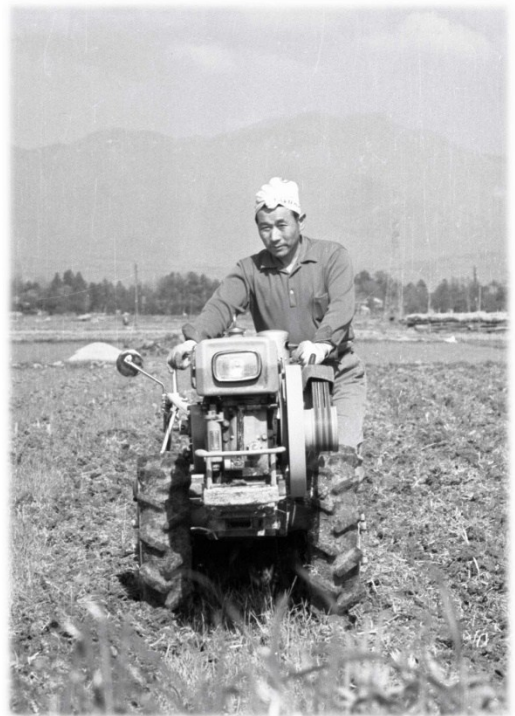


しろかき  
代掻き

昭和 30 年 5 月 31 日 井上一郎写真資料

## 馬耕から機械耕作へ

昭和 30 年以降、農業は機械化の道へと歩いていきました。そのため作業効率は格段にアップし、収穫量も向上しました。機械は次第に大型化し、「歩く農業」から「乗る農業」へと転換。現在も様々なニーズに応じて進化を続けています。



耕運機

昭和 45 年 大曲市広報写真



### 砕土機(さいどき)

代掻き(しろかき)のとき、土を砕くために使用していたもの。馬や牛に引かせながら使った。ヤマサ工業株式会社が製作・特許を取得したもので、主に昭和 10~20 年代に使用された。耕運機や乗用トラクターが登場してからは、牛馬を使った農業が行われなくなり、昭和 50 年代には完全に姿を消した。

文化財課所蔵

### 石油発動機

昭和 30~40 年代に作成された井関(いせき)農機株式会社の石油発動機(エンジン)。主に農業機械で用いられた。この発動機は井関農機の耕運機などで使用されていた。当時、井関農機はコンバインやトラクターのエンジンをいすゞ自動車や三菱重工業などから購入していた。そのためエンジン自体は形などから、おそらく新三菱重工業株式会社の制作で、「三菱かつらエンジン」と同型と思われる。石油エンジンは次第により効率的なディーゼルエンジンやガソリンエンジンに変わっていった。

文化財課所蔵